養護学校における在来馬とのかかわりを活かした学習の試み

安　川　千壽子
（長野県木曽養護学校）

Ⅰ．学校の概要

本校は、平成８年度に開校した長野県木曽郡木曽福島町にある県立の知的障害養護学校である。小・中・高等部を合わせた各年度の全校児童生徒数が28～39名という、とても小さな養護学校で、寄宿舎を併設している。木材をふんだんに使った校舎、立ち上がろうとする木曽馬像を配したカリオン、玄関ホールに掛けられた漆の技法を駆使して描かれた御岳山の絵画など地域の特色を活かした学校環境が整えられている。

学校の周辺には、花見ができる散歩道や魚が泳ぐ川があったり、学校から歩いて10分ほどの所に学友林があり、山菜を採ったり、キノコの栽培ができたりするなどの自然環境に恵まれている。

学校が建つ地区には、学校協力会という地域の方々の組織があり、行事や環境整備などで多くの地域の方々が来校されて、子ども達の活動を支えてくださっている。

長年にわたる地域の方々からの強い要望で開校された養護学校なので、開校以来教育課程編成の基本方針に「地域の自然、産業、人々から学び、共に育ち合える教育実践」を据えており、交流的な学習や地域の方の学習への技術協力なども比較的スムーズに実現し、木曽馬の里での様々な学習、木工の技術指導や環境整備での共同作業、総合的な学習の時間、産業現場等における実習、学校祭や学習発表会での交流などで地域の方々とのかかわりを深めながら、児童生徒の自立する力を高める学習をめざして実践研究をすすめている。

Ⅱ．木曽馬とのかかわりを活かした学習への経過

地域の自然、産業、人々に学ぶという本校の基本方針により、開校年度から地域の素材を活かした学習の試みを行っており、その中の一つに地域の自然に親しみながら、縦割りグループで活動して校内交流を深めようとする全校遠足がある。開校年度から４年間、小学部から高等部という年齢に差がある児童生徒が一緒に活動できる場所として、リニューアルオープンしたばかりの「木曽馬の里」が目的地となった。

開校年度である平成８年の全校遠足当時、乗馬体験のある児童生徒はほとんどいなかったが、多くの児童生徒が「木曽馬の里」の職員の方や教師の支援を受けて馬に乗り、笑顔を見せたり、Ｖサインをしたりして喜ぶ姿が見られた。しかし、何人かの児童生徒は、木曽馬におそるおそる近づくだけだったり、怖いと言って身体を硬くして涙ぐんだり、馬房に近づくことさえ嫌がって逃げてしまったりした。

翌年からは、木曽馬におそるおそる近づくだけだった児童や馬房に近づくことができなかった生徒が乗馬することができるようになったり、身体を硬くして乗馬していた児童生徒がリラックスした表情を見せたりというような変化が見られたり、前年の乗馬の様子を覚えていて自分で目標を決めて乗馬する生徒や乗馬の後も馬の側を離れず再度乗りたがる児童がいたり、初めての時は泣いて木曽馬を怖がっていた高等部の生徒が、かかわりを増す毎に木曽馬が好きになり「木曽馬の里」で開かれた木曽馬運動会に自分から参加して部門優勝をしたことで自信をもち「動物を世話する仕事がしたい」と言い出すなど、児童生徒の木曽馬に対する興味・感心が具体的な姿を通して見えてきた。

平成10年２月には、社会経験を広げたいという教師と保護者の願いから、中学部生徒１名が木曽馬の里で４日間の職場体験を行い、乗馬の場面でリラックスした表情を見せたり、作業に意欲的に取り組むようになったりと大きな変化を見せた。

これらのことから、木曽馬とのかかわりを通じて児童生徒の自立する力を高めていくことができる可能性があるのではないかと考え、教育課程への位置付けを模索するようになった。

１．厩務作業を活用した職業的な学習の取り組みの実践例

平成10年２月	中学部生徒２年１名 「木曽馬の里」で職場体験
平成10年５月	高等部生徒２年１名 「木曽馬の里」で現場実習
平成11年２月	中学部生徒３年１名 「木曽馬の里」で職場体験
平成11年６月	高等部生徒１～３年17名 「木曽馬の里」で牧場実習 高等部生徒１年６名 「木曽馬の里」で職場体験 高等部生徒１年２名 「木曽馬の里」で現場実習
11月	高等部生徒１年２名

「木曽馬の里」で現場実習
高等部生徒２年１名
「ホテル木曽路」の木曽馬牧場で現場実習

（１）主な活動

① 馬房清掃（ぼろ取り・おがこ撒き）・通路清掃・水入れ・牧草集め

② 屋内馬場の水撒きと整地・ブラッシング・馬装手伝い・引き馬・乗馬

（２）高等部牧場実習の反省から

・馬に乗ることを楽しみにしている生徒が多く、励みになっていたようだ。

・初めての仕事だった生徒が多かったにもかかわらず、積極的な姿がみられた。

・ぼろ取り、通路清掃、屋内馬場の整地などよい仕事があったが、高等部生全員が一度に実習すると仕事量が少ない。

２．厩務作業と乗馬体験学習の試みの実践例

対象：馬とのかかわりに興味・関心があると思われる児童・生徒（９名）

平成11年12月（２日間）

※ 指導・助言　滝坂信一、笹本　健（国立特殊教育総合研究所）

（１）主な活動

１日目【高等部生徒】ブラッシング・馬装手伝い・乗馬・ぼろ取り・えさやり・通路清掃

【小学部児童】乗馬・えさやり

２日目【高等部生徒】馬装手伝い・乗馬・ぼろ取り

【小学部児童】ブラッシング・馬との歩行・乗馬

（２）児童生徒の様子から

・「木曽馬の里」へ行くことが分かると、にこにこしたり、いそいでスクールバスに向かったりする姿が見られた。

・馬に乗った後、一人一人が指を鳴らしたり、「お願いします」「しゅっぱーつ！」と言ったりなどして、馬の発進に対して意思表示をしていた。

・乗馬中に笑顔がでる子が多く、学習が終わっても降りたがらなかった子もいた。

・高等部生の中には、ブラッシングやぼろ取りに自分から取り組むことができた生徒、引き馬や乗馬を希望して自らその場へ向かって活動した生徒がいた。

実践例１・２から、木曽馬とのかかわりが児童生徒の活動への意欲を喚起したり、コミュニケーション手段や社会性を広げたりして自立する力を高める機会（素材）になる可能性が強く示唆されたため、平成12年度から学校体制を整えたり、実施について「木曽馬の里」の設置・運営主体である木曽郡開田村の協力を得たりして、教育課程に位置づけることにした。

Ⅲ．馬の特性を活用した指導の展開

１．実施にあたって

スクールバスで30分程の距離にある屋内馬場など設備が整った「木曽馬の里」があるという地域的な条件と、その施設職員の方々が障害のある子どもの受け入れに協力的であるという条件を活かし、馬の特性を利用した学習を教育課程の中に位置づけ、意欲と主体性を大事にした自立活動や働く意欲と働く力を育てる職業教育などを行う。また、これらを通して、馬の特性を利用した学習の効果的な位置づけ方、学習内容、自立する力の高まりについての実態を明らかにする。

２．実践内容・方法及び評価

○ 学部や学級で計画をたて木曽馬とかかわる学習を行ったり、木曽馬とのかかわりが特に有効と思われる児童生徒が定期的に木曽馬の里へ行って学習を行ったりする。

○ 個々の自立する力の高まりを集約し、有効な指導内容を分類整理する。

○ 木曽馬の里で学習することで児童生徒が最大限に力を発揮できたり、自立する力が高まったりする場面を分析し、教育課程への効果的な位置づけや学習内容を具体化する。

○ 馬とのかかわりで高まった自立する力と生活面に現れる自立する力の高まりの関連性を探り、有効な支援を考えるなどして、個別の教育計画に活かす。

３．年間計画と教育課程への位置づけ（平成12・13年度）

（１）個別の定期的な馬の学習（小学部～高等部・自立活動）
４月中旬～７月中旬、９月上旬～11月中旬
年間10回程度

（２）牧場実習（高等部１年生・職業）
５月下旬～６月上旬　５日間

（３）総合的な学習の時間（平成12年度　高等部）
６月下旬　５日間

（４）合同学習（平成13年度小学部・高等部）
６月下旬　５日間

（５）産業現場等における実習（高等部・職業）
６月上～中旬、11月上～中旬

（６）学校祭での乗馬体験コーナー運営
（高等部・生活単元学習）　10月

（７）校外学習
（部・学級・作業班などで、児童生徒の興味・関心を活かした学習の一環として必要に応じて計画・実施）

※ 全校遠足では人数が多いために木曽馬とのかかわりが不充分で形式的になってしまい深まりが期待できないの

で、(1)～(7)のいずれかの形態で児童生徒全員が年間1回は木曽馬とのかかわりをもつようにする。

以下、形態ごとに実施した内容について述べる。

(1) 個別の定期的な馬の学習の展開

① 期間、実施日（年間で10回前後）

平成12年度　5月～7月中旬、9月～12月　金曜日

平成13年度　4月～7月中旬、9月～11月　木曜日と金曜日のどちらか

※ 週末の帰省日は避けるようにする。

② 日程など

学習日に小学部～高等部の参加者がスクールバスを利用して、「木曽馬の里」に行って学習する。高等部生徒で帰路は路線バスを利用する場合もある。

平成12年度の学習時間 全　体　10：00～11：30

平成13年度の学習時間 小学部・中学部 10：00～11：30

高等部　13：00～14：30

③ 参加児童生徒を決める手順

校外学習での木曽馬とのかかわりの様子、保護者の願い、子どもの特性やその子どもの自立活動全体の内容を考慮しての教師の願いなどを各部で検討し、各部から児童生徒を推薦する。

子どもにとっての必要性、学習時間、指導体制を総合的に検討し係が原案を作り、教育課程検討委員会に提案し学校として参加児童生徒を決定する。

保護者に参加承認を得て、最終的に決定とする。

④ 実践に関する打ち合わせと反省

原則として火曜日か木曜日15：15～15：55とするが必要に応じて適宜行う。

打ち合わせや反省については月又は週の予定で連絡する。

参加職員については打ち合わせ会と反省会への参加を最優先とする。

参加職員で分担して学習の記録を残し、これらの会で取り上げる。

⑤ 学習の流れと教師の動き（留意点、具体例など）

【前日までの教師の準備】
・願いや前時の様子から、学習計画をたてる。
（感想や願いなどを話せたり書けたりする子どもの場合は学習カードの使用も考える。）
・家での様子を知ったり、健康状態を把握したりする。
・カレンダーに印をつけたり、前日の帰りの会で予告したりして馬の学習を意識づける。

【当日の朝の教師の動き】
・家での様子を知ったり、健康状態を把握したりする。
・朝の会などで馬の学習があることを確認する。
・登校から木曽馬の里へ向かうスクールバスの中での様子などを考慮して、学習内容を決める。
・木曽馬の里に着いてスクールバスを降りたら、木曽馬の里の方にあいさつをしたり、トイレに行くなどの学習の準備を始めたりするように促す。
※ 木曽馬の里に着いてから帰るまで、馬を驚かせない・馬の後ろを通らない・指をかまれないようにえさをやるなど安全面での配慮を徹底する。

学習の流れ	○　留意点　◆具体例　※特に大事な学習条件など
乗馬の順番確認をする	○ 子どもの実態に合わせて、馬の写真の下に子どもの顔写真を貼ったり、名字や名前を大きく書いて示したりして分かりやすくする。 （高等部の生徒の場合、条件が整えば希望を出し合って話し合いで決めることがあってもよい。）
順番を待つ	○ 馬にかかわったり、仕事を手伝ったり、その子にあった活動ができるようにする。 ◆ 馬にかかわる （ブラッシング・馬装の手伝い・馬が準備運動で歩く時一緒に歩くなど） ◆ 仕事を手伝う（通路の清掃・水入れ・えさ運びなど） ◆ 放牧されている馬を見る、散歩するなど
乗馬の準備をする	○ 子どもの実態に合わせて簡単な準備体操をすることもある。 ○ サイズの丁度よい帽子をかぶれるように支援する。 （あご紐をすることについては補助が必要な児童生徒が多い。） ○ 厚着をしていたり、馬具にかかりそうな紐がついている服を着ていたりしたら、安全を考えて脱いだ方がよいことを話して脱いでもらうようにする。

馬に近づく	○ 前に乗馬していた子どもが馬を降りて馬場を出てから、次の子どもが馬場に入るようにする。 ○ 子どもの名前を呼んだり、名前のカードや写真を示したりしてその子の順番になったことを伝え、馬に乗るという意思表示を確認する。 （必要最低限の声や支援で行うようにする。） ○ 馬場に入ったら、馬を驚かせないように、前から静かにゆっくり近寄るようにする。 （子どもの状況に合わせて支援する。急がせたり、無理強いしたりすることはしない。） ○ 馬にあいさつをするように促す。（一人でできるようになったら見守る。） ◆ 首のつけねあたりをなでたり、軽くたたいたりする。
馬に乗る	○ 馬の左側から乗る。 子どもの状況によっては、乗せてほしいという依頼や意思表示が出るのを待つこともある。（自分で乗る場合と補助されて乗る場合がある。） ◆ 踏み台を使って自分で乗る。 ◆ 補助してもらって地面から乗る場合には、馬の左側に立ち、両手で鞍のグリップ（取っ手）を持ち、右足で立って左足を膝から曲げる姿勢をとると乗せてもらいやすい。 （曲げた左足を補助する人に支えてもらうと、そこが支点になって体を持ち上げやすくなるため） ※ 肢体不自由の障害がある子どもの場合は、両サイドに立ち複数で補助するなど、特に適切な補助が必要になる。 ※ 使用する鞍は、グリップ（取っ手）があるだけで、子どもに馬の動きや体温の温かさが伝わりやすい軽乗鞍とする。 ○ 状況に応じて、子どもの希望を聞いたり、教師が学習の流れを説明したりして、可能な範囲で学習内容を確認しあう。 ○ 子どもが馬の背に乗ったことを実感し、出発してもよい状況になるまで待つ。 ○ 障害の状況や子どもの好みにもよるが、靴と靴下を脱いで裸足になって乗馬することもよい。
出発の合図をする	○ その子のできる出発の合図がでるまで待つ。 ◆ 手を挙げる。 ◆「あー」などの声をだす。 ◆「出発進行！」「お願いします」などと言う。 ◆ 馬の腹を軽く蹴って馬に合図をする。など
1・2周	○ 心身の緊張がほぐれていくので、並足でゆっくり進む。 ○ 子どもの状況を見たり、子どもからサインがでたりしたら、子どもの腰と足に手を添えるなどして、子どもが安心して乗馬できるように補助する。（乗馬中、特に大切は支援になる。） ○ 子どもの様子によっては、この段階が3周以上になることもある。
3～8周	○ 願いや課題にそった学習を行う。 ◆ ボール、お手玉、輪、好きなぬいぐるみなど子どもが気に入っている物を持つ。 ◆ 持った物の受け渡しをする。 ◆ 目をつぶって乗る。（子どもの様子を見て時間や距離を調整する。） ◆ 手を離して乗る。 （片手づつ離す・両手を離す・子どもの様子を見て手を離す時間やグリップからの距離を調整する。） ◆ 色々な体の動きに挑戦する。 ・腰のあたりで手を組む・手をあげる（前・上・横） ・手を平行に保つ（片手・両手）・馬上体操をする ・好きなポーズを取る・後ろ向きで乗る・横座りで乗るなど ◆ 途中で止まって、鏡に写った自分の姿を見たり、馬の背に仰向けに寝て体を伸ばしたりする。 ◆ 手前を変える。（左回り・右回り）

	◆ 馬を円周に合わせて歩かせる（巻乗り・左回り、右回り） ◆ 馬をＳ字や８の字に歩かせる。 ◆ 子どもの状況に合わせて、早めの並足、早足など馬の速さを調整する。 ※ 教師主導にならないように、子どもの様子やサインをよく見たり、子どもの願いを聞いたりしながら学習を進める。学習計画にとらわれず、状況に合わせて、支援を段階的に減らしていったり、支援の方法やタイミングを工夫したりして、最適な支援ができるように心がける。
９・10周	○ 基本の姿勢でゆっくり進む。 学習が終わることを伝え、降りる準備（気持ちの切り替えなど）ができるようにする。
馬から降りる	○ 馬が止まったら、しみじみと馬の感触を楽しむ時間をとる。 ◆ 基本の姿勢で余韻を楽しむ。 ◆ 馬の背に仰向けに寝て体を伸ばす。 ◆ 馬の左側に両足を、馬の右側に両手を垂らして馬の背に腹這いになり、ストレッチをする。 ○ 降りる気持ちを確認してから、降りる支援をする。 ◆ 馬の左側に両足を垂らして馬の背に腹這いになり、馬の左側にゆっくり降りる。 ○ 必要に応じて、急激に落ちないように体を支えて補助する。 ※「降りたくない」という意思表示が合った場合は、状況説明などをして降りるように促すが、どうしても降りたくないという場合は、１周とか半周とかいう約束をして、約束の範囲で乗馬をする。状況に応じて降ろすタイミングを判断する。
馬から離れ馬場を出る	○ 馬にお礼のあいさつをするように促す。（一人でできるようになったら見守る。） ◆ 馬の首のつけねあたりを撫でたり軽くたたいたりする。 ◆ 馬の名前を呼びながら「ありがとう」などの声をかける。 ◆ 人参や氷砂糖をあげる。（基本的には全員の学習が終わった後の方がよいが、状況によっては認めることある。） ○ 馬を驚かせないように、前から静かにゆっくり離れて馬場を出るようにする。
かたづけ・身支度	○ 体や気持ちの状況を感じたり、表現したりできる時間を取る。 ○ 帽子を脱いで、棚のあった場所に返すようにする。 （一人でできるようになったら確認だけする。） ○ 脱いであった服を着るなどして身支度を整えるようにする。
帰りの時間まで待つ	○ 馬にかかわったり、仕事を手伝ったり、ゆっくり休んだり、その子にあった活動をする。 ◆ 馬にかかわる。 （馬装をとく手伝い・馬具のかたづけ・ブラッシング・馬の体拭きなど） ◆ 仕事を手伝う。（馬場のぼろ取りなど） ◆ 放牧されている馬を見る、散歩する、えさをやる、休む　など
帰途につく	○ 全員が乗り終え馬装をといたら、人参、氷砂糖、赤つめ草など木曽馬の里の方が許可してくれたものを馬にあげたり、馬の首のあたりを軽くたたいたり、馬の名前を呼んでお礼の声をかけたりして、馬への感謝の気持ちを育み、表現できるような働きかけをする。 ○ 木曽馬の方へあいさつするなど感謝の気持ちを伝えられるようにする。 ○ スクールバスの中での様子を見たり、感想を聞いたりする。 ○ 路線バスを利用する高等部生徒については、必要な学習を事前に行ったり、疑似体験をしてイメージを具体化したりする。

※ 馬場にいる時間は20分前後を目安として学習を組み立てる。

※ 学習の条件をできるだけ同じにしたり、より安全に学習ができたり、馬と子どもの集中力を高めたり維持したりするために屋内馬場での学習を原則とする。

※ 一人で乗ってみたいという希望があり馬への合図（出発・停止）が正確にできるようになった子どもには、一般的な乗馬を学習として行うこともある。

【学習後の教師の動き】

・学習内容を確認したり、感想を聞いたりして、子どもが学習を振り返ることができるようにする。（感想や願いなどを話せたり書けたりする子どもの場合は学習カードの使用も考える。）

・学習の様子、学校に戻ってからの様子、家での様子を記録する。

・生活の中で子どもが馬のことを意識した行動をとったときや馬に関連した話題を出したときには、次の学習を楽しみにできるようなかかわりをし期待感を高める。

《念願だった一人乗りをするＪさん》

⑥ 成　　果

(ｱ) 参加した児童生徒の様子から

・コミュニケーション手段（意思表示など）や対人関係に広がりが見られた。

・意欲的な行動や見通しをもった行動が多く見られるようになった。

・学校では見られない動きをしたり、できなかった動きができるようになったりした。

・乗馬したり、「木曽馬の里」に行ったりすることで、リラックスできた子どもが多かった。

・木曽馬への興味・感心が高まり、乗馬に集中できるようになったり、えさをやって様子をじっと見ていたり、自分からブラッシングをしようしたり、学校生活の中で木曽馬を意識している行動（馬の学習の写真を指さす・自転車に乗って発進の合図をするなど）が見られたりするようになった。

(ｲ) 運営面から

・係が早めに牧場へ行き、準備の手伝いや打ち合わせをすることで学習がよりスムーズに行えた。

・スクールバスだけでなく、路線バスの利用も取り入れたことで、参加者の数と全体の学習時間を増やすことができた。

⑦ 課題として残ること

(ｱ) 参加した児童生徒の様子から（→課題を解決するための方法など）

・子どもの様子から、何をしたら良いのか、何が求められているのかが分かりにくい場面があった。子どもの主体性を大切にしながらも、教師が願いを明確化して学習に取り組めるようにしたい。

→ 教師主導で学習を行いがちなのでかかわり方を改善する。

→ 子どもの様子を的確に見とれるように研修を深める。

・馬とかかわる順番を待っている子どもの活動をどのようにするか。

→ どのようにしていたら良いかについて、馬の専門家である「木曽馬の里」の方から指導していただくようにする。

→ 職員体制、チームワークの工夫が必要になる。

(ｲ) 運営面から

・係会を定期的に開き、必要な話し合いをすることが難しかった。

・職員の研修を深めて、自立活動の学習としての成果を得られるような支援の方法を探る必要がある。

・参加する児童生徒の決め方について職員間の共通理解を深めたい。

・学習記録の取り方を工夫したい。

毎回記録係を置くことが困難な状況では、担当教師が学習のあとで記録を書くことになる。この記録は印象記述になってしまい、客観的な記録になりにくい場合が多い。

→ 記録用紙の形式と職員体制に工夫が必要だ。

→ 記録用紙の形式については、以下のようなものが考えられる。

定期的な馬の学習記録用紙

【　　部：氏名　　】　　（担当者：　　）

<table>
<tr><td colspan="2">育ちへの願い</td><td colspan="2">※ 個別の教育計画から</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">定期的な馬の
学習での願い</td><td>児童・生徒</td><td>※ 聞き取り又は木曽馬とのかかわりの様子から</td></tr>
<tr><td>保　護　者</td><td>※ 保護者との連携で進める学習から</td></tr>
<tr><td>教　　師</td><td>※ 個別の教育計画や自立活動の内容を考慮して</td></tr>
<tr><td>学習計画</td><td colspan="3">※ 願いを具現化するための支援などについて可能な範囲で計画する。
※ 学習を進めながら訂正していく。
※ 形式にそって学習計画まで作成し、学習回数で必要な枚数を印刷しておき、学習毎に本時の願い以降を記録していく。</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">月　　日
第　　時
本時の願い</td><td>児童・生徒</td><td></td></tr>
<tr><td>教　　師</td><td>※ 保護者の願いも活かせるようにする。</td></tr>
<tr><td colspan="2">本時の
学習計画</td><td colspan="2">※ 前時の様子や考察から、事前に考えておく。
※ 可能な範囲で係が木曽馬の里へ連絡し、打ち合わせをする。
（子どもの様子、馬の状態などの情報交換が大事になる。）</td></tr>
<tr><td colspan="2">学習までの
様子</td><td colspan="2">※ 当日の朝の様子（家・学校）と健康面での特記事項など
※ スクールバスへの乗り込み方、木曽馬の里へ向かっているときの様子、支援、特記事項など</td></tr>
<tr><td colspan="2">馬場に入る
まで</td><td colspan="2">※ 活動内容、支援、様子、考察など</td></tr>
<tr><td>馬場での学習</td><td>はじめ
願いに
そった活動
おわり</td><td colspan="2">※ 活動内容、支援、様子、考察など
（乗った馬・使った馬具や道具・学習時間なども記録する。）</td></tr>
<tr><td colspan="2">学習後の様子</td><td colspan="2">※ 馬場を出てから帰校後の様子、保護者からの連絡など
※ 連絡ノートなどで学習の様子を保護者へ連絡する。</td></tr>
<tr><td colspan="2">学習を
振り返って</td><td colspan="2">※ 学習を振り返って、反省・評価をする。
※ 反省・評価から、次時の願いや学習計画を決め出し、次時の記録用紙に記入する。
（係会で客観性を高めることも大事にする。）</td></tr>
</table>

⑧ 個別の事例（平成13年度学習のまとめから）

⑺ 高等部３学年　Ｆさん

【障害の様子など】
・自閉症
・発語はないが、内言語は多く、人とのかかわりが広がりつつある。
・繰り返しの活動で見通しがもてると、自分で教室移動をして必要な物を準備することができる。
・汗をかいたり、雨にぬれたりしてストレスがたまると、声をだしたり、パニックを起こしたりすることがある。
・物の位置などに関してこだわりが見られ、あるべき場所にあるべきものがないと自分でもとに戻したり、乗り物での座席を同じ所にしたりする傾向がある。
・高等部２年の時、一人で泳げるようになったり、スキーでボーゲンの技術が向上しスピードコントロールをして曲がりながら滑れるようになったりした。どちらも、自分から繰り返し取り組み楽しんでいる様子が伺える。乗馬中の姿勢についても２年時に横座り・後ろ向きなどできることが増えた。
・中学部２年から職場体験や産業現場等における実習で木曽馬の里へ通い、高等部２年から定期的な学習に参加した。

【育ちへの願い】
・安定した気持ちで生活し、一人でできることや人とのかかわりが増えてほしい。
（自立する力としては意思表示・やりとり・見通し・情緒の安定・自主性）

学習での願い	生　徒	・馬に楽しく乗りたい。
	保護者	・好きな活動に取り組んで安定して過ごしてほしい。
	教　師	・いろいろな体の使い方を経験してほしい。 ・コミュニケーション手段が定着するようにしたい。 ・社会性や対人関係を広げたい。 ・安定して活動できる場面を増やしたい。

学習の様子

【学習前】
・馬の学習を予告すると、高等部の教師を教室や廊下に展示してある馬の写真の所へ連れて行き指さしたり、学習中にパンフレットに載っている馬の写真を見つけて何度も指さしたり、馬の学習に行くまでにやるべきことを早くやってしまって待っていたりすることがあった。
・スクールバスに走って行って乗ったり、木曽馬の里へ行くまでの車中でリラックスした様子で静かにしていたりする姿が多く見られた。
・木曽馬の里の方と一緒に木曽馬が放牧されている所へ行き、引き綱をつけてもらった後、一人で馬を引いてくることがあった。早足で歩くので馬との歩調は合わないことが多く、「ゆっくりね」と声をかけられることが多かった。
・木曽馬の里の方が馬をつないでいる間に、軽乗鞍を二つ倉庫からもってきて「どっち？」と聞くような素振りを見せたり、はみや鞍下をもってきたりすることがあった。
・指示された所をブラッシングしたり、鞍を馬の背に乗せたりして乗馬の準備を手伝うことができたが、毛並みにそってブラッシングしたり、鞍の前後を確認したりすることは正確にはできなかった。

【学習中】
・いつも決まった帽子をかぶって馬に近づき、両手でグリップを掴んで左足を軽く曲げて上げながら振り返り「乗せてほしい」という意思表示をすることができるようになった。
・４月に２回、乗馬中に馬が急に方向を変えて怖い思いをしたため、そのときは乗馬をやめて逃げてしまった。その後は、横についている教師の手を握って乗馬することが続いたが、乗馬を拒否することはなかった。安心して乗れるようにすることを中心に学習を継続した。
・６月下旬の学習時に、引き馬をして一緒に歩いてから乗馬したことで、一人でグリップをつかんで乗馬することができるようになった。その時に、横座りや後ろ向きなども２年生の時の様にできるようになったので、その後の学習では取り入れて行った。

学習の様子	・２学期に入り、乗馬中にボールをもって乗ることができたり、両手を教師に支えられて屋内馬場を半周できたりすることがあった。 ・教師は学習を終えるつもりだった時、Ｆさんが横座りになったので降りるのだと思って補助しようとしたら「乗りたい！」と言った。（ように感じた。）そこで、「１周したら終わりでいい？」と問うと頷いたので横座りで１周したが降りようとしなかった。「普通の座り方で１周したら終わりにしよう」と問うと頷き、１周した後はスムーズに降りたことがあった。 ・馬へのあいさつやお礼については、声を掛けられてから行うことがほとんどだったが、馬に触れる時間が長くなったり、触れる手の部分が多くなったりした。 【学習後】 ・馬に人参をあげるとき、年度当初から筒の先に人参を挟んで渡すと一人でできていた。始めは筒の馬に最も遠い場所をもっていたが、だんだん馬の近くになり、２学期になると馬のすぐ近くを持っても平気になっていった。筒は必要ないと考え、手でもって人参をあげるように促したが怖がっていてうまくできず、タイミングがあってできたのは２回だけだった。 ・帰りの車中では、体の力が抜けたような状態になって、けらけら笑い続けることがあったり、静かに窓の外を見ていたりし、声をあげることはほとんどなかった。
考察	・学習に出かける前の様子などから、馬の学習を心待ちにしていたことが伺える。 ・気持ちが高まりすぎて、乗馬しただけで満足してしまいがちだったが、屋内馬場で引き馬をしてから乗馬することで、乗馬にじっくり取り組めるようになっていったように思われる。 ・怖い思いをした後にそのまま帰らず、しばらくして落ち着いてから意思確認をし、短時間乗馬して帰ったことが次の学習につながったと考えられる。また、Ｆくんの馬に乗りたいという気持ちが怖いという気持ちに勝っていたことからもＦくんの馬の学習への意欲が理解できると思われる。 ・学習の見通しがもてるようになったことから、乗馬に必要なものを自分で用意しようとする活動がうまれてきたと思われる。継続して学習する機会がもっとあって経験できる回数が増えれば一つ一つの動きに正確さがついていくのではないかと思われる。 ・馬に乗ったことでストレスが解消されたり、体がリラックスしたりし、乗馬後、体の力が抜けたような状態になったり、笑い続けたりしたと考えられるのではないか。このことから、Ｆさんにとては定期的に学習に参加すること有効だったと思われる。 ・２年生の時と同じ動きを３年生の時の乗馬中にも行ったが、一つ一つの動きがとてもスムーズにできるようになったと感じた。特に、横座りから後ろ向きになるきは、ほとんど支援なしで一人できることが多かった。 《馬上で姿勢を変えるＦさん》
考えられる学習の流れ	木曽馬の里の方に軽く頭を下げながら膝を少し曲げて「あー」と言ってあいさつする→木曽馬の里の方と馬を連れに行き、引き馬をして連れてくる→ 鞍やはみや鞍下を準備する→示範を見たり、声をかけられたりしながら毛並みにそってブラッシングをする→補助してもらいながら鞍下と鞍を馬の背中に乗せる→木曽馬の里の方と引き馬をしながら屋内馬場を２～３周一緒に歩く→合図をし、補助してもらって馬に乗る→４～６周、並足で手前を変えたり巻き乗りをしたりしながら乗る→どんな乗り方をしたいか意思表示して乗る（横座り・後ろ向き２～３周くらい・補助されながら手を左右に伸ばして１周・ボールを両手で持って１周など）→前向きの安定した状態で１周乗る→止まった後、馬の背中に仰向けに寝てしばらくゆっくりする→馬を降りて手のひらで馬の首の付け根あたりを軽くたたいてお礼をする→馬からはずした馬具を器具庫に片づけたり、馬のブラッシングをしたりする→筒を使って人参をあげる→あいさつをして帰る

(イ) 高等部２学年　Ｃさん

【障害の様子など】
・自閉的な傾向
・肥満傾向があり体を動かすことに抵抗がある。
・ピアノを弾いたり、ダンスをしたり、歌ったり、絵を描いたりすることが好きで、集中して創造的な活動ができる。
・作業学習で見通しがもてると、手早く質の高い製品を作ることができる。
・睡眠が充分に取れなかったり、周囲の人に常時同意を得ないと活動に移れなかったりすることが多い。
・１年生の二学期に、希望して定期的な馬の学習に２回参加した経験がある。

【育ちへの願い】
・興味のあることや関心のあることを増やし、友達や教師と一緒に活動することを通して、安定した気持ちで生活を送れる中で、一人でできることを増やしていってほしい。
（自立する力では興味・関心、集団参加・情緒の安定・自主性）

学習での願い	生　徒	・馬のブラッシングをしたり、馬に乗ったりしたい。
	保護者	・安定して学習に取り組める時間を増やしたい。 ・肥満を少しでも解消できるようにしたい。
	教　師	・情緒の安定を図りたい。 ・自己決定の力を高めたい。 ・運動量を増やし、体重の増加をできるだけ防ぎたい。

学習の様子

【学習前】
・朝の会や帰りの会で定期的な学習のことを話すと、表情をゆるめて「馬に乗りたい。」ということがあった。
・木曽馬の里に向かうスクールバスの中では「大丈夫？」と問うことはあったが、回数的には比較的少ないように感じることの方が多かった。
・ブラッシングは木曽馬の里の方や教師から「やってみる？」と聞かれると「やる。」と答えてやっていた。馬のすぐ側に立つことには抵抗があり、腰が引けている状態ではあったが、ブラシを動かす方向やどこをブラッシングするかについての指示は聞き入れて正確にできていた。
・ブラッシングの終わりを自分で判断することはできなかったが、木曽馬の里の方の指示を聞いてブラッシングをやめ、自分で所定の場所へ道具をかたづけることはできた。
・木曽馬の里の方と一緒に引き馬をすることがあった。木曽馬の里の方が馬との間に入っていると安定して馬と歩調を合わせて歩くことができていた。

【学習中】
・乗馬の順番がくると帽子をかぶって台にあがり一人で乗馬できることが多かった。
・馬へのあいさつは忘れがちで、木曽馬の里の方や教師に「あいさつは？」と言われると馬の首あたりをそっとなでていた。
・出発の合図は一人でできることが多く、準備ができると「お願いします」とはっきり言っていた。
・乗馬中は、発語が少なく集中して活動にとりくんでいた。馬が馬場の低くなっている所に足を入れてバランスを崩した時に「大丈夫？」と聞いたが教師が「大丈夫だよ」と答えたら、問いかけはその１回だけで後は15分ほどの学習中「大丈夫？」という問いかけはなく、教師が質問したことについての答えはしていた。
・学習１回目から目をつぶって乗っていることができ、10秒くらいから始めて屋内馬場の半分くらいまで挑戦してできた。
・４周ほど黙って乗っていた後、何か小声でつぶやいたので、問いかけると「回りたい。」とはっきり答えたことがあり、その後２回巻き乗りをしたところ笑顔が見られた。

学習の様子	・体が硬い（特には肩に力が入っている感じがよく分かる）状況ではあるが、補助なしで乗馬できたり、３回目からは手を離して乗ることにも挑戦するようになったりした。４回目には両手を離して掌を上に向けて笑顔でポーズをとる姿も見られた。 【学習後】 ・人参をあげることに最初はとても抵抗があった。３回目に教師と一緒に15cmくらいの長さに切った人参をあげることができたら、自分から「もう１回」と言って、再度人参を持って教師といっしょにあげることができた。その後、「鼻をなでる」と自分から言って、一人で馬の鼻をなでたことがあった。 ・路線バスの中では、教師への問いかけはほとんどなかったり、眠っていたりした。 ・絵を描いているときに、「馬の絵は描ける？」と聞くと、馬と自分を短時間で描いた。その後、何日か馬と自分の絵を自分から描いていた。 ・馬の学習のまとめの時、躊躇なく馬に乗った感想を書いていた。 他の作文とちがって、自分の気持ちの記述が入っていた。 ・休み時間にピアノを弾いていたので「馬に乗っている感じを弾いてみて」と話すと、２つのメロディーを弾いてくれた。学習発表会で披露することにして練習したときに、最初の頃は２つのメロディーのどちらかを弾いていたが、だんだんと１つのメロディーだけを弾くようになっていった。 ○ 保護者の感想（学習の様子を参観し、体験乗馬をした次の日の連絡ノートから） ・今日は、とても貴重な体験をさせていただきました。 私も乗せていただきました。こんなに、気持ちよくリラックスできるものとは思ってもみませんでした。Ｃも10秒ほど目をつぶって乗っていたようです。 （中略）とてもラッキーな一日でした。一郎君（馬の名前）ありがとう。 （中略）帰りの車の中、Ｃは目をつぶって乗っていましたが、20分位して「大丈夫？笑っていい？」と繰り返し始めましたが、いつもより穏やかでした。 （中略）季節の変わり目は体の調子を崩しやすく、昨晩は眠りが浅かったかもしれません。今夜は７時から眠り熟睡しています。一郎君に感謝！機会があったら、もう一度行ってみたいです。今後の予定を教えてください。 【後日、下校後Ｃさんを馬に乗せに連れて行きたいというご希望を話されたり、お友達と再度乗馬に行かれたりした。】
考察	・馬が怖いという気持ちはあるが、馬に乗ることで感じる心地よさは意識できていて、興味をもって学習に参加できてきたようだ。 ・えさをうまくあげられた経験から、少しづつかかわりの幅が広がっているので、回数を重ねることで学習に深まりがうまれそうだ。 ・乗馬しているときに周囲の人に同意を求めることが少なく集中できることが多かったり、自分の気持ちをはっきり伝えることができたり、できるようになったことをはっきり意識できたりして、情緒の安定や自己決定の力の高まりに有効な学習になっていると思われる。 ・運動面では、はっきりした効果は見られないが、乗馬した日に熟睡できたことがあったという保護者からのお話から考えると、乗馬の時間や方法や回数を工夫することで効果が見られる可能性はあるのではないかと思われる。
考えられる学習の流れ	どの馬で学習するかを教師の提案の中から選択する→ブラッシングをして乗馬の準備をする→屋内馬場を木曽馬の里の方と一緒に２周くらい引き馬をしながら一緒に歩く→帽子をかぶって準備をしたら馬にあいさつをして馬に乗る→４～６周くらい途中で手前を変えながら並足でゆっくり乗る→どんな乗り方をしたいか教師の提案の中から選択して行う（巻き乗り・片手ずつ離す・両手を離す・掌を下又は上に向ける・手を挙げる位置を変えるなど）→安定した姿勢でゆっくり１・２周する→乗り終えた状況をゆっくり感じる時間をもつ（場合によっては感想を話す）→馬から降りる→自分で帽子を脱いで棚に返す→教師と一緒に人参をあげたり、馬の鼻に触れながら話しかけたりして馬にお礼をする→木曽馬の里の方にあいさつをしてからバス停まで歩く→教師と一緒に路線バスを利用して帰る。

《両手を広げたポーズのＣさん》

(ｳ) 小学部４学年　Ｒさん

<table>
<tr><td colspan="3">【障害の様子など】
・早産未熟児
・脳性麻痺による体幹の機能障害
・身障者手帳１種３級
・１歳時医療センターに母子入所以来、ＰＴ．ＯＴ．による訓練を継続している。</td></tr>
<tr><td colspan="3">【育ちへの願い】
・意欲を持って取り組めることを増やしてほしい。（自立する力では興味・関心、自信）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">学習での願い</td><td>生　徒</td><td>・馬に乗ったり、えさをやったりしたい。</td></tr>
<tr><td>保護者</td><td>・興味のあることに意欲的に取り組んでほしい。</td></tr>
<tr><td>教　師</td><td>・興味ある馬との活動を通して、意欲をもって取り組めることを増やしてほしい。
・下肢機能の向上や体幹の維持を通して、身体の機能を回復できるようになってほしい。</td></tr>
<tr><td>学習の様子</td><td colspan="2">【学習前】
・遠足や校外学習などで乗馬の経験があり、乗った馬の名前はよく覚えていた。
「木曽馬の里」へ行くことについては、「○月○日に行くよね」とかなり前から楽しみにし、日記にも書いてきた。

【学習中】
・「ボスお願いね」「あと少し、頑張ってね」などと声をかけながら馬に乗っていた。
・慣れるまでは右足の股関節が痛いと言ったり、体の位置を自分で直すことができなかったりしたが、回を重ねていくにつれて足の痛みがなくなったり、自分が乗りやすい位置に体を移動させたりすることができるようになってきた。また、同じ馬に乗っていても「イチロー、背が高くなったかな」「体の力が抜けてきた、慣れてきた」「補装具を取ったら温かい」と馬の感触を表現するようになった。
・馬房で目にした馬の名前をすぐに覚え、牧場に放牧されている馬を見て名前を言い当てるようになった。
・馬の学習があると必ず自分で人参を切って持って行った。始めは乱切り、次には棒状、更に長い人参を棒状に切るなどその都度、馬に食べさせやすい切り方を工夫してきた。馬に手をなめられても怖がることがなくなった。

【学習後】
・馬の学習の後は必ず日記を書いてきた。
・馬の学習から帰ってきて疲れているにもかかわらず、自ら水着になり教師を誘ってウォータースライダーに向かった。
・プールでは毎日浮き輪を使って浮いていることが多かったが、ヘルパーを腕と腰につけて75メートルを泳ぐことができた。苦しくなってくると「ラッキー、見ててね、頑張るから」と馬の姿を思い浮かべ励みにしながら頑張った。
・馬を引いてくださった木曽馬の里の方に自ら手紙を書いた。また、家でも学校でも馬の絵を夢中になって描いた。
・馬の名前を忘れてしまっている教師に「先生はよく忘れられるね。私はラッキーやイチローのことが忘れられないよ。また馬の学習に行きたい。」と言ってきた。</td></tr>
<tr><td>考察</td><td colspan="2">・馬の学習の後、馬の名前を呼びながらヘルパーをつけて75m泳ぐことに挑戦する姿から、馬は本児の心の支えとなる存在であったと思われる。また、教師に誘われてやっと取り組んでいたウォータースライダーだったが、馬の学習で疲れているにもかかわらず自ら水着になり教師を誘って取り組んだ。馬の学習を繰り返すことにより馬への思いが高まり、馬とかかわることにより気持ちが充分満たされたのだと思われる。このように馬の学習は、本児の気持ちを安定させ積極的に生活するために有効な学習であったと思われる。
・馬の学習の後、木曽馬の里の方に自ら手紙を書いたり、毎日のように何枚も馬の絵を描いたり、馬を題材とした日記や作文、書き初めを書いたりし、本児の学習領域が広がり意欲的に取り組むことができた。馬の学習を続けることで更に意欲を持って取り組むことが増えてくるのではないかと思われる。</td></tr>
</table>

考察	・馬の学習が始まったばかりの頃は、股関節の痛みを訴えることがあったが、繰り返すことによりなくなってきた。普段使わない筋肉を使ったための痛みだったようだ。また同じ馬に乗っていながら「馬が背が高くなったみたい」と感じたのは、背筋が伸びたからではないだろうか。更に、馬の動きに合わせて乗りやすい位置に自分で体を移動させることができるようにもなってきている。このように馬の学習により体の機能回復が期待できると思われる。
考えられる学習の流れ	・できるだけ大好きな馬とかかわれるように、木曽馬の里の方に可能な範囲で学習の時の馬を調整してもらう。 ・馬に乗るまでの時間を充分とり、本児が自ら馬に乗りたいと思えるようになってから馬に乗るようにする。 ・馬に人参をやったりブラッシングをしたり、馬にかかわることのできる時間を充分に確保する。 ・いろいろな馬を見ることを楽しみにしており、馬の名前や特徴を覚えては話題にすることが多かったので、馬房にいる馬や放牧されている馬を見る時間を確保していく。 ・まだ、一人で馬に乗ることに不安があるため、本児の気持ちを聞きながら腰や背筋や下肢に手を添え介助していく。 ・ゆっくりと屋内馬場を回り、心身ともにリッラクスできるようにする。 《大好きなラッキーに乗るＲさん》

（２）牧場実習（平成13年度を中心に）

① 趣　旨：

(ｱ) 学校を出て地域の職場で仕事をすることで、働く経験を広げる。

(ｲ) 働いたことが役に立つ体験をすることで働く喜びを感じる。

(ｳ) 任された仕事の出来栄えを自分で判断したり、決まった時間内でできる仕事に精一杯取り組んだりすることを通して、働く気持ちを育む。

② 期　間：平成13年６月４日（月）～ ６月７日（木）

③ 日　程：

7：55	木曽福島駅発
8：34	「木曽馬の里」バス停着
9：00～12：00	午前の実習
12：00～13：00	昼食
13：00～16：00	午後の実習と一日のまとめ
16：23	木曽馬の里バス停発
17：00	木曽福島駅着

④ 対　象：高等部１年（生徒３名、学級担任３名）

⑤ 作業内容：

馬房の仕事・厩舎の通路清掃・馬の世話（ブラッシングなど）

馬場の整地・水まき・環境整備など

※ 作業終了後、乗馬体験

⑥ 準備するもの：

作業のできる服装（長袖・作業できるズボン）・着替え（作業用服装一式）

帽子・汚れてもよい靴（長靴）・汗ふき用タオル・弁当・水筒軍手・ナップサック・ハンカチ・ティッシュ

⑦ 交通手段：路線バス

⑧ 留意点：

(ｱ) 木曽馬の里の方が仕事をされているところをよく見て、手伝わせていただくことから始める。

(ｲ) 教師はできるだけ指示を出さないようにしながら一緒に働き、生徒のできる姿を見つけるようにする。

(ｳ) 職業教育の視点から、学校以外の場所で、その道のプロのすごさを生徒に感じてもらうことを大事にする。

⑨ 生徒の感想から：

(ｱ) 仕事ができるようになった。馬と仲良くなれてよかった。全力で働いている人がいたから、これからの作業学

《一輪車でえさ運び》

習を全力でやりたい。

(ｲ) 返事やあいさつは大きい声でできました。最後まで休むことなく働きました。教えてくれる人の話を聞けるようにしたいです。

(ｳ) ブラッシングがやれてよかったです。上手になったと言われました。馬に乗ったとき、背筋が伸びて姿勢がよくなってきたと言われました。学校でも姿勢をよくしたいです。

⑩ 考　察：

(ｱ) 分かりやすい仕事がいくつかあったり、分からないことや必要なことを尋ねやすい雰囲気があったりするので、個別の実習の前に基本となることを学ぶためには効果的な学習になる。

(ｲ) 路線バスを利用したり、道路を歩いたり、接したことのない人（木曽馬の里の方・時には観光客）と接したりすることで、学校内ではできない体験ができ、社会性の高まりが期待できる。

(ｳ)「くさい、くさい」と言いながらもボロ取りを続けたり、えさや水をやる仕事に興味をもったりする生徒達の姿から、作業がうまくなっていくことや他者の役にたつ自分を意識することで意欲や自信が高まっているのではないかと思われる。
（馬に乗せてもらうことが楽しいという生徒が多く、自分を乗せてくれる馬の役に立ちたいという気持ちが生じるのではないかと思われる。）

(ｴ) 学習カードの項目が作業学習や他の実習にも関連する内容になっているので、反省がしやすく、他の学習にも反省を活用できる可能性がある。

(ｵ) 比較的大きく体を動かす作業で道具を使うことが多いので、手先の細かい仕事が苦手な生徒には、道具を使う経験や体の動きを広げることができるよい場面になる。

(ｶ) 実習の時間と仕事量、支援の方法などについては生徒の実態に合わせて検討し改善する必要があるが、木曽馬にかかわったり、開田村の自然に親しんだりできることで情緒面での効果も期待できそうなので、教育課程への位置づけを工夫しながら継続していきたい。

（３）総合的な学習の時間での試み【平成12年度・高等部】

① 単元名：「木曽馬の里へ行こう」

② 単元設定の理由：

新学習指導要領の実施に向かって総合的な学習の時間の試行がもっとも必要であると考え、学習素材を選択した所、高等部の生徒には作業学習での素材集めや全校遠足でなじみがあり、体験的な活動が複数可能な場所であり、地域の人々や自然とのかかわりが深まったり広がったりする可能性がある木曽馬の里が最適だということになった。

③ 単元展開：

学習の趣旨や時間数を確認する→教師が示した学習素材から選択する→木曽馬の里へ行き、やりたいことを具体化する→個々に学習をすすめる（学習内容をまとめる活動も含める）→学習内容を報告しあう

④ 参加者：高等部生徒全員17名
（１年５名・２年６名・３年６名）

⑤ 留意点

(ｱ) 生徒にとっても教師にとっても初めての学習形態であること、学習期間が限定されていることなどから、学習の始めの段階である程度の見通しがもてるように、教師が提示したいくつかの学習素材から生徒が選択することから始める。

(ｲ) 生徒の様子を教師間で連絡しあい、生徒が願いをもち、調査活動などを通して可能な限り自分の力で具現化できるように支援する。

⑥ 時期：６月19日（月）～26日（月）

⑦ 学習内容

A	馬の絵・そば打ち体験・東京・名古屋からの交通調べ
B	御岳山の絵・そば打ち体験
C	馬の絵・乗馬・ 散歩
D	御嶽山の絵・フラワーアレンジメント・開田村の方言調べ
E	馬の絵・フラワーアレンジメント・今までのことを作文する。
F	馬の絵・乗馬・定期的な馬の学習
G	馬の絵・乗馬・開田村のおみやげ調べ （観光案内所とおみやげセンターでの聞き取り調査・インターネットでの調査）
H	馬の絵・写真（明花・一郎・ボス・しろ）を撮ってアルバム作り・フラワーアレンジメント
I	御嶽山の絵・フラワーアレンジメント・K小学校についての調査
J	馬の絵・デジカメで写真撮影（馬・自然）・パソコンで写真編集
K	馬の絵・写真・開田村の暑さ、寒さを調べ（観光センターで聞き取り調査して発表）・定期的な馬の学習
L	馬の絵・植物集め（押し花）・石集め・集めた物で作品製作
M	馬の絵・馬の目と兎の鳴き声についての調査
N	馬の絵・そば打ち
O	馬の絵・馬の名前調べ（30頭）・乗馬・定期的な馬の学習
P	馬の絵・そば打ち・観光マップ資料集め（食べ物・観光地）・オリジナルマップ作り
Q	御嶽山の絵・馬の名前調べ・そば打ち・乗馬

絵画制作と地域の方との郷土料理作りには 全員が取り組んだ。また、学習最終日の６月26日にプチ学習発表会を行い、一人一人が自分の学習したことを発表した。絵や作った物やまとめた文書を見せて説明したり、クイズ形式で発表したりして表現する経験を広げることができた。また、友達の興味・関心を知る機会にもなった。

⑧ 事　例：Kさん　　※ 郷土料理、定期的な馬の学習については省く

【育ちへの願い】
・人とのかかわりや経験を広げながら、自分で判断して行動したり、意思表示したりする場面を増やしてほしい。（判断力・社会性）

単元における願い		
	生徒	・木曽馬の絵を描きたい。 ・きれいな自然の写真を撮りたい。 ・開田村の気候を調べたい。（暑さ、寒さはどのくらいか調べたい。）
	教師	・大きな紙に挑戦して、自分のタッチで最後まで描いてほしい。 ・「～したい」という意思表示をできるだけ自分からして、学習に取り組んでほしい。 ・ぶれのない美しい写真を撮ってほしい。 ・気候を調べることを通して、人とのかかわりや経験を広げてほしい。

指　導　内　容	主　な　支　援
○ 写生するときに、自分で納得する場所を選んで馬をよく見て、じっくり描く。	・本生の体力の限界や背筋力の乏しさ、排尿の事情を考慮して、場所選びには、日陰、背もたれのある所を選ぶようアドバイスする。 ・描きたい馬や風景の話をよく聞き、願いが可能な限り実現できるように支援する。（場合によっては、経験の少ない模造紙大の紙に大きくダイナミックに表現することを選択肢に含める。） ・描いている時には、できるだけ言葉をかけないようにして集中力を高めるようにする。
○ 写真を撮る時は、何をどのように撮りたいのか言葉で表現して場所を決めたり、安全な体制を整えたりして、ぶれのない美しい写真を撮る。	・願いを充分引き出すようにする。 ・両手に軽いマヒがあったり、手、肘、肩の動きがぎこちなかったりするので「ぶれ」にくい姿勢で撮影できるように支援する。 《Kさんが撮影した木曽馬の写真》
○ 開田村の厳しい自然環境を知るために、自分から質問したり、調査の方法を知ったりし、分かったことをまとめて発表したりする。	・どんなことを聞きたいのか話を聞き、メモしていくと質問しやすいことや聞きたいことを聞き逃さないことを説明する。 ・観光案内所でなかなか話を切り出せないでいたら、声をかけるなどしてきっかけを作る。 ・質問に対する答えを一緒に聞きメモする。（ビデオ撮影しKさんが自分で再確認できるようにすることも考える。） ・質問する以外でどんな調査方法があるかを具体例を示しながら説明する。 （どの方法で調査するかはKさんが選択できるようにする。） ・まとめの時間が充分ないので、Kさんの願いを聞きながら支援し、発表時は原稿を用意したり具体物を示したりして、内容が分かりやすくなるようにする。

【考　察】
・絵、写真、自然、気候など以前から本生が非常に興味を示していたものが素材になっていたので、意欲的に継続して学習活動に取り組むことができた。
・経験が少なかった模造紙大の紙に描いたが、途中で隣で描いていた友達の絵を見て、似たような表現をし始めた。友達の描き方をいいなあと感じた結果だったと思われるが、生活面では友達の行動を模倣することはよくあったが、表現面では初めてだったので、Kさんの今まで見られなかった一面を発見したような思いがした。
・写真撮影は、風景と馬を中心にKさんの撮りたいものを撮り、美しい写真に仕上がった。Kさんの願いが実現でき、成就感がもてたのではないかと思われる。
・気候については観光案内所で質問したがKさんの知りたかったことが充分聞けなかった。事前の依頼方法、打ち合わせの大切さ、場に応じた適切な支援の必要性を感じた。

⑨ 考　察：

(ｱ) 生徒一人一人が自分のやりたいことを選択し、活動方法を教師と相談して決めて学習をすすめ、学習の経過や成果を発表するという学習の流れを通して、自発性・意欲、社会性、知識・理解・技能の高まりが見られた。このことから、総合的な学習の時間のねらいの一つに迫れたり、学習の組み立て方が一つ分かってきたと思われる。

(ｲ) 生徒が取り組めそうなことで、教師が指導体制を取れる内容を提示して生徒が選択するという場面を設けて学習を始めたが、選択肢以外での希望がいくつかでて具現化できた。創造的な活動には抵抗がある生徒が比較的多い中で、このように生徒からの希望で学習内容の広がりが見られたことは、中心素材として選んだ木曽馬の里が、学習にかかわる多くの条件を備えていたためだったと考えられる。今後も、他の学習での活用が期待できると思われる。

(ｳ) 教師の提示した内容が多すぎたこと、期間が短かったことなどで個別の活動が中途半端になってしまった生徒がいた。(後日、課題別学習で対応した例があった。)

(ｴ) 単元構成、支援の方法、実施期間などについて研究をすすめる必要がある。

（４）合同学習【平成13年度】

① 時期・期間：６月下旬　５日間

② 日程と主な活動：9：30　学校発（スクールバス使用）
10：00　木曽馬の里着
10：00〜11：15
馬房清掃（共同で）・えさやり・乗馬など
11：15　木曽馬の里発（スクールバス使用）
11：45　学校着

※ 最終日は路線バス使用で、お弁当を持っていき、午後帰校

③ 参加者：高等部生徒３名、小学部児童５名（計８名）

※ 馬に乗ることを考慮し人数を決定

④ 成　果：

(ｱ) それぞれの子どもの役割分担をはっきりさせたこと、木曽馬の里の方が清掃やえさの量の見本を示してくださったことで、子どもたちは見通しをもって活動ができた。

(ｲ) 小学部の児童と高等部の生徒でペアを組んで活動したことや、木曽馬の里の方とかかわりが生まれたことで、対人関係の広がりが見られた。

(ｳ) 作業内容が変化しても他に対応できる活動が用意できるので、木曽馬の里は校外での学習場所としてよい条件を備えていることが分かった。

(ｴ) 子どもたちが、馬に乗ることを楽しみにしているので、２日目から、作業体験と乗馬をグループで分けて行うなど両方を充実できるように工夫したことはよかった。

⑤ 課　題：

(ｱ) 職員間の打ち合わせや木曽馬の里への連絡が充分できなかった。

(ｲ) 帰校が遅れてしまい、給食準備等に迷惑をかけてしまった。

(ｳ) 活動場所が離れていたため、互いの状況を把握することがうまくできず、全体の流れがスムーズにいかなかった場面があったので連絡方法を工夫する必要があった。

(ｴ) 縦割りで活動するとてもよい学習だったが、最終日以外は木曽馬の里にいる時間が短く活動が充分できなかった場面もあったので、毎日お弁当を持って行って一緒に食べる日程にすればよかった。

⑥ 児童生徒の様子や感想から：

(ｱ) えさをやることを楽しみにしていた小学部低学年の児童は、「うんま（えさという意味)」と繰り返し言いながらえさの時間に思う存分えさをあげることができ、大満足していた。その後、普段かかわりのない高等部の教師しかいなかったのに、「馬に乗りたい」と意思表示して笑顔で馬に乗った。最終日には、バス停から木曽馬の里へ向かう途中で、赤つめくさをたくさん取ってもっていき、馬にあげていた。

(ｲ) 作業的な活動に抵抗感があると思われる小学部高学年の児童が、高等部生と一緒に馬房のボロ取りやおがこ撒き、通路清掃を意欲的に行った。この児童の保護者から、画期的なできごとだと感想をいただいた。

(ｳ) 小学部の児童とかかわることが苦手だと感じていた高等部生が、ボロ取りやえさやりを自然な雰囲気で小学部生と一緒にできた。かかわり方には課題が残ったが、お互いに他者と協力するというよい体験になったのではないか。

(ｴ) 高等部生の感想から：

「ボロ取りやえさやりなどの仕事で、小学部の人を助けてあげながらできてよかった。ぼくらしいことで活躍できたと思う。」

「今回の経験で、馬房の掃除や通路清掃の大切さがよく分かりました。」

⑦ 今後の方向

(ｱ) 木曽馬とのかかわりは子どもたちが楽しみにできる活動で、自立する力の高まり（意欲・自信・社会性）も見られるので継続したい。

(ｲ) 学校出発を早めたり、教師が連絡や時間配分をきちんとして馬に乗る時間をできるだけ確保していきたい。また、可能ならお弁当を持っていく日を増やしたい。

(ｳ) 異年齢集団での学習でも、馬とのかかわりを通して

《えさやり・ブラッシング》

参加者にあった活動を行うことができたので、木曽養護学校の特色ある学習の一つとして取り入れていける可能性が高いことを感じた。

（５）産業現場等における実習

① 期間・実施日：毎年５月下旬６月上旬及び11月上旬の５～10日間（個人によって異なる）

② 日程と主な活動：

(ｱ) 生徒の様子や路線バスの時間にあわせて個別に日程を組む。仕事を始める時間は９時頃でほぼ一緒だが、仕事を終える時間は個人で異なる。

(ｲ) 馬房清掃（ぼろ取り・おがこ撒き）、通路清掃、水入れ、えさやりなどの仕事を行う。可能な状況であれば、乗馬の機会をもたせていただく。

③ 参加者：

(ｱ) 生徒や保護者の希望を聞いたり、校外での学習体験を広げるために教師がすすめたりした生徒

(ｲ) 校外で働くことを体験しつつ、自立活動的な内容の学習をすることが必要と思われる生徒

④ 事　例：Ｆさん

（中学部２年～高等部３年まで実習／高等部２・３年は定期的な学習に参加）

＜指導してくださった木曽馬の里の方の感想から＞

定期的な馬の学習や普段の実習などを通して、だんだんとやりたいことを自分から表現できるようになってきているように思える.。Ｆさんが自覚しているかどうか定かではない（自覚しているように感じる）が、実習と定期的な馬の学習とで雰囲気がなんとなく違う。

《掃き掃除をするＦさん》

特に、実習時は厩舎に着くなり竹ぼうきを取り、掃き掃除を始める。作業的には、他の事をお願いしたいときもあるが、自主的に動いていることはやってもらうようにした。やってほしい仕事を話せば、だいたいのことは理解し、ゆっくりではあるがやってくれる。ボロ取りに関しては、だんだんと手を抜くようになってきている？（以前の方が動きが良かった様にも見える。）ただし、ボロを取るときの手の動きは以前より良くなっていて、雑な動きが少なくなり、正確さが増している様に思える。

見ている限りでは、竹ぼうきでの掃き掃除が好きというか、自分から進んでする仕事になっており何も言わないでいるとほうきを持ってきた。ただ、見ていないと同じ所をずうっと掃いている傾向がある。

馬の一連の作業（放牧場から捕まえて繋場に＞ブラッシング＞装鞍）は流れを理解しているので、時間になるとロープを置いてある所へ行き、場合によっては自分でロープを持って馬をつれに行きたがる様子を良く見せるようになった。始めは馬が怖かったので放牧場の中に入ることを嫌がることがしばしばあったが、今ではためらわずに入っていくようになった。馬を捕まえるときは「ナスカン」がうまく使えないので手助けが必要だが、「ナスカン」を違う式のものに変えれば自分で捕まえる事ができるようになるのではないだろうかと思ってる。

放牧場～繋ぎ場では、実際に馬を引いてもらい自分で連

れて行く。ロープ（引き綱）の先端の方を持ち引っぱっていく、速く歩いているときには「ゆっくりね」と声をかけるとゆっくりと引いてくれる。馬のほうを見ていなければ（自分に迫ってくると怖くなってしまう）一人でも引いていける。気づかずに一人で引いていて、気づくと慌てて、場合によってはロープを離してしまうので、やはり補助（馬側に誰か一人入る）が必要と思われる。この補助は、馬とＦさん両方を抑える感じにするとテンションがかかり、ゆっくり歩かないといけなくなるので効果的だと考える。

ブラッシングは、全くできない状態からのスタートだったが、次第に少しずつブラシを通して馬の体に触れるようになり、Ｆさんなりに手でゆっくり触れるようになってきた事もあり、効果的な学習になっていると思われる。馬の背中のみを縦方向にかけていた時期から比べると、首・お腹の下・後肢などまでできるようになったのは大きな進歩である。「ここだよ」「今度はここだよ」などと指示する事により馬の片側は完全に一人でできるようになってきた。時間があれば全身もこなせているが、動きは同じ所をいったりきたりしているので、Ｆさんの中では同じ所をやっているのかもしれない。

また、装鞍に際しては頭絡・鞍などの準備ができ、鞍はちゃんと軽乗鞍（２つハンドル）を持ってくる。馬に合った頭絡を持ってくることは一人ではできず、どれを持ってくるか近くまでいって実物を示して説明している。

実際に鞍を載せる段階では、焦っているときは順番や向きが間違っていることがあるが、指示をゆっくりしていくとゼッケン・マット・鞍の順番にきちんと載せていける。（細かな位置については、見てあげる必要がある。）向きが違うときも、比較的にこやかな表情なので違う事を分かっているのかもしれないと思う。このことについては、まだ丁寧に仕事ができるようになるのではないかと感じている。

馬場の中での引き運動（１・２周）は、その後に乗れるということが分かっている様子で張り切っている。引くことによって気分がある程度まで高まっていくのではないかと思うが、逆に気分が高まりすぎているときに引いてもらうと今度は落ち着くという効果が見られることもある。気分を安定させるという意味ではとても有効な学習なのかもしれない。

乗ることは中２のときから始めている（始めは一人で乗れなかった）。先生と一緒に乗ることから始まり、次第に慣れてきた。一年程前～半年くらい前には飛び乗りを見せたがこの頃は見せなくなった。最近は、毎回のように「早く足をあげて乗るのを手伝え」と言わんばかりに馬の横で片足を折って待っているようになり、支えるような感じで軽く足を上げてあげると自分からすっと乗る。

乗ってからは常歩での直線運動を中心に行っていくが、乗るだけである程度の満足感を得ている様子が見受けられる。しかし、高３の後期に入り同じグループの中で調馬索運動を取り入れたものや、道具を使って乗る事を行っていると、自分から今までやった事のあるいろいろな動きをしたいと要求してくることも度々あった。速歩に関しては何度か試したが、怖がっている様子だった。後ろ向き乗り・横向き乗り・背中の上で寝る等はできている。寝る時は最初の頃はゆっくりできていたと思うのだが、最近ではすぐに起きてしまう。身長が伸びた事によって寝た時にやや不安定になり恐怖心が出てきたのではないかと考えている。寝ることがゆっくりできれば、体も充分にリラックスできるのではないだろうか。

馬に関する学習の中で、仕事などをゆっくり、丁寧に、最後までやるというのが課題として残ったと思う。また、一人で続けられる時間が、少しずつ長くなっていけば、高等部を卒業して社会に出て仕事をするときにも良いと思う。

（「木曽馬の里・乗馬センター」中川 剛）

（６）学校祭での乗馬体験コーナー運営（平成12・13年度）

① 期　間：９月中旬から10月中旬の学校祭（駒の子祭）に向かっての生活単元学習の中で高等部の推進グループが計画・実施

② 日程と主な活動：学校祭（駒の子祭）２日目　一般公開の時間に実施

③ 開始のきっかけと当日の様子など

学校際である「駒の子祭」でやりたいことについて生徒がアンケートに書いた中に、肢体不自由があり自力歩行ができないＪさんの「木曽馬を呼びたい」という願いがあった。Ｊさんは前年度の「駒の子祭」の開祭式で作り物の馬に乗って登場し開祭宣言をした経験があり、そのときから、本当の馬に乗って登場したいと思っていたことも分かった。

Ｊさんの願いを受けて職員やＰＴＡ役員で検討したところ、開校５周年記念の「駒の子祭」であり、木曽馬との定期的な学習を始めた年でもあったので、学校祭に木曽馬を借りるための予算を考えようということになり、Ｊさんの願いを実現できる見通しがもてたので、Ｊさんに企画をたててもらうことになった。

Ｊさんは、前年の経験からどんな場面で木曽馬を活躍させることができるかなど具体的な案を考えることができ、開田村振興公社に電話をして木曽馬を借りるにはどうしたらよいかなどについて問い合わせをしながら、企画をたてていった。

「駒の子祭」の推進グループに属していたＪさんは、駒の子祭２日目に木曽馬を呼んで、がんばろう会やイベントや閉祭式で活躍させたいと考え、グループのみんなに提案して承諾を得た。

また、開田村振興公社のご厚意やＰＴＡ・高等部作業班からの資金援助も実現して木曽馬が学校祭に来ることになっ

た。イベントなどに必要な物を考えて用意していく中でもＪさんの意欲的な姿が随所に見られ、期待感が高まっていく様子が伺えた。

Ｊさんは、「駒の子祭」２日目当日、木曽馬に乗って登場して「がんばろう会」の始めの言葉を言ったり、イベント「馬おるで！！」の運営をしたり、閉祭式で再び木曽馬に乗って登場して閉祭宣言をしたりした。閉祭宣言の時には涙ぐむ姿も見られたことから、自分が推進してきたことが実現し成功した充実感をもつとともに、大きな成就感を得られたのではないかと思われた。

イベントには、地域の子どもや本校の児童生徒が多数参加して引き馬を楽しんだ。また、馬の周りに寄ってきて、えさをやったり、体に触れたりして馬のかかわりをもつ子どもがたくさんいた。

④ 平成13年度の様子など

平成12年度実施の体験や印象が多くの高等部生徒の印象に残っていて、学校祭でやりたいことアンケートに木曽馬を呼びたいという願いが書かれていた。職員にも予想がついていたので、資金援助についてはある程度の見通しをもっていたが、生徒に資金のことも含めて企画してほしいと話し、生徒の企画であるという意識付けを前年より高めるようにした。Ｊさんは、前年に引き続いて企画を行うグループにいて、特に資金援助についての調整を行い、「木曽馬の里」に経費を支払うことまで自分で行うことができた。

「駒の子祭」当日には、木曽馬の里の方のご厚意で木曽馬が２頭来校し、約150人が引き馬を楽しむことができた。

⑤ 感想文などから

＜Ｊさんの「高等部の思い出」の作文から＞

駒の子祭で木曽馬を呼べてよかったです。なぜかと言うと、３年生の時には、ほとんど自分一人で木曽馬を呼ぶことができたからです。開田村役場に電話で申し込んだり、当日は責任をもって木曽馬を見ていたり、最後はお金をしっかり払ったりできて良かったです。乗馬体験のイベントも、しっかりできたし、お客さんもいっぱい来て喜んでくれてうれしかったです。

＜「駒の子祭」に来校した郡内の小学生の感想から（抜粋）＞

木曽馬に乗って楽しかったです。養護学校では、よく木曽馬を見に行ったり、乗ったりできるのが良いなと思います。うらやましいです。馬はかわいかった。揺れたので結構怖かった。来年も来たいです。

（７）校外学習（平成12・13年度）

① 期間・実施日：学部や学級で計画・実施
日時が重ならないように係で調整して
「木曽馬の里」に依頼

② 日程と主な活動

○ スクールバスで10時頃木曽馬の里に着き、１時間半くらい活動してスクールバスで帰る形態が多い。

○ 引き馬による乗馬体験、えさやり、散策などの活動が主になる。

③ 参加者：小学部（学級で）・高等部（作業班・学級・全体）

④ 発展的な活動：

○ 小学部
- 個別の学習での絵画制作・作文など
- 畑で馬にやる人参の栽培

○ 高等部
- 作業学習で作る製品のデザインへの活用
- 「木曽馬の里」に製品の販売を委託
- 木曽馬とのかかわりを「木曽っ子にカンパイ！」という劇にまとめて学習発表会で発表（‘木曽っ子’とは木曽地域での木曽馬の呼び方の一つ）

《木工班の木曽馬コースター》

Ⅳ．まとめと今後の見通し

１．成　　果

（１）木曽馬とのかかわりを含む学習で興味・関心、意欲、対人関係、社会性など自立する力の高まりが見られた子どもがいた。

（２）乗馬だけではなく、木曽馬の里へ行き散策する、仕事を経験する、調査活動をするなど学習内容が広がった。

（３）全校遠足のように全員が同じ活動でなく、子どもの年代や状況にあった活動で学習を行うことができて、より充実した学習になった。

（４）木曽馬とのかかわりが、いろいろな学習場面で活きるようになった。

（５）回数は少なくても木曽馬とのかかわりの様子の変化

を見ることで、子どもの成長を捉えやすい場面となる。（例えば、水泳やスキーのように季節毎に行う学習での子どもの変化が捉えやすいのと同じように、少なくとも１年に１回木曽馬にかかわる機会を継続して記録を残していけば成長の過程が理解しやすいと思われる。）

２．課　　題

（１）経験が重なって行くことで、子どもの力が高まったり、木曽馬とのかかわりが深まったりするような学習を取り入れて行くことが必要になるのではないかと思われる。

（２）発達段階を考慮した本校としての学習内容をまとめ、教師が見通しをもった支援をしていけるようにしたい。

（３）学習形態におけるねらいの違いを確認したり、校外の学習という特長を更に活かして、自立する力がより高まるような支援を探っていきたい。

３．今後の方向

（１）定期的な学習では、自立活動の指導内容を生徒の意欲を基盤に学習できる場合が多く、効果が見られるので、今後も実施する方向で考えたい。運営については、自立活動の係が中心にすすめ、学校としての方向を示すようにしたらどうかと考える。

　また、家庭との連絡をすすめたり、学習時にボランティア参加を取り入れたりして学習の充実を図りたい。

（２）学部・学級での学習を継続して行い、一年に一回は木曽馬とふれあう機会を作っていきたい。

（３）３年間の実践から、職業学習での位置づけが効果的だと分かってきたので、期間や仕事内容などを考慮しながら学習を充実させていきたい。

（４）生活単元学習での活用を飼育体験を含めて探りたい。

（５）休日の木曽馬の里の利用について可能性を探り、余暇活動として木曽馬とのかかわりが活かせるかどうか検討したい。

（６）実践をより高めて行くための研修等の内容を充実させていきたい。具体的には、ビデオ映像などの客観的な資料を充実させる、資料の収集を行う、県内外で馬とのかかわりを学習に取り入れている学校、施設、保護者などと情報交換をするなどがある。

４．学習を進めるための体制とシステム作り

　継続的な学習を円滑にすすめるために、事前準備や現地での実施について係を設けるなど教師間の十分な協力体制をつくることが重要であることが明らかとなった。また、以下のような点については、実施手続きのシステムをつくって実施していくことが必要である。

（１）定期的な学習への参加者推薦（教育課程検討委員会へ）

（２）定期的な学習への参加決定通知（保護者へ）

（３）開田村振興公社と「木曽馬の里」への依頼状作成・送付・確認（全体・月毎）

（４）スクールバス関係の手続き（場合によっては昼食関係の手続きも必要）

（５）学習計画の提出と記録の推進

（６）内規にそった教師の旅行命令票への記載確認

（７）拡大係会の運営（打ち合わせ・反省））

（８）研修会の計画・運営

【資　　料】

１．馬事関係の側面

（１）施設名　　木曽馬の里・乗馬センター

（２）施設の概要

　施設は、長野県南西部、木曽御嶽山の裾野に広がる開田高原にある。ここは古くから馬と人が共に暮らす文化のあるところである。開田村の主要産業は近年、夏に涼しい高原という土地柄を活かした「観光業」になってきた。村では「(財) 開田村振興公社」を立ち上げ、馬・蕎麦・温泉を村外に向けてＰＲしている。とりわけ、木曽馬は木曽郡原産の日本在来の馬で、多いときには郡下で7000頭も飼育されていた。その当時、開田村では郡内で一番多い2000頭あまりが飼育されていたことから、現在では「木曽馬のふるさと」といわれている。木曽馬の里は、数が少なくなっている木曽馬の保護・育成を目標として平成８年にリニューアルオープンした。オープン当初は村の農家から馬を譲り受け、繁殖・育成をしながら来訪者を対象に体験乗馬を行っていたが、「保存＝活用」という観点から施設の充実と馬の調教が図られ、馬場内での乗馬も平成11年から行うようになった。現在は、引き馬をメインとした乗馬体験施設として、名古屋方面にも知られるようになってきている。

（３）障害のある子どもたちへの取り組みの経緯

　リニューアルオープンして間もなく、全校遠足で来訪した木曽養護学校の児童生徒を引き馬で乗馬させたのが初めての取り組みだった。その後、平成11年まで木曽養護学校の全校遠足が毎年１回あったり、平成10年の２月に職場体験ということで中学部の生徒を一人約１週間厩務作業に受け入れたりしたことから、子どもたちとの接点が多くなっていった。２月に行っていた実習が５月～６月にも行われるようになり、学部、学級、個人で「木曽馬の里」へ来て厩務作業をしたり、乗馬体験をしたりするようになっていった。

　平成12年度から「定期的な馬の学習」も行うようになり、決まった子どもたちが定期的に木曽馬とかかわるようになり現在に至っている。

《ぼろ取り作業》

（4）実際場面と工夫した点・課題と今後の見通し

始めは、単に馬に乗ってもらうことや厩務作業から入って行き、ゆっくり触れたい子などは装鞍作業ではブラッシングから徐々にはじめていった。

厩務作業主体の実習の場合、乗るという時間はほんの3分くらいのことが多いのだが、乗るまでの過程の中に装鞍、引き馬など馬と対話のできる時間をできるだけ取れるようにしている。（一般客のいるときには多少その時間が短くなってしまうこともあるが・・。）

「定期的な馬の学習」が平成12年度から始まり、決まった子どもたちが定期的に学習に来るようになり、厩務作業よりも乗る活動を中心に行う学習が多くなった。

馬は好きだがなかなか近づけない子がいたり、平気で触る子がいたり、いろいろな子がいて勉強になる。特に、初めは全く馬に触れなかった子が学習を行う毎に馬に近づいていくのには驚かされる。

乗る場面では、始めはビールケースを組んだ物を使っていたが、乗り場（牧場にすえてあるもの）や跳び乗り（足の手助けをして）に変っていった。

このことで、乗り降りがスムーズになり、一人一人の乗る時間に若干ではあるが余裕が出てきた。乗る時間はそのときによって違うが、乗る過程から下馬まで大体20分程度で、子どもの調子が悪ければもっと短いときもあるし、場合によっては乗らないときもある。　馬に乗らないで、馬と顔をあわせてゆっくり考えている子もいる。やはり乗っている時間よりも馬との対話のほうが良い子もいるのであろう。

授業という限られた時間の中で学習しようとすると無理も生じ、いつも時間は押し気味になる。理想的には1時間に2人（乗る過程を含めて一人に30分は時間が取れる為）か2時間で5人くらいがよいように思う。1時間で3～4人というのは時間的にどうしても無理が出てくるので今後の課題でもある。

「定期的な馬の学習」が今後どうなるかにもよるのだが、木曽の文化である木曽馬と人との自然なかかわりを大切にし、できる限り木曽養護学校の学習に協力していきたいと考えている。しかし、こういう学習が単発的にではなく長期的に継続して広がり、他の学校などにも取り入れられていくためには、現行の「乗馬料免除」ではなく、学習形態に合わせて少しでも料金をいただくことを提案したい。このことで、在来馬である木曽馬が人を乗せる仕事で活躍して経済的な効果をもたらす可能性が高まることを村の方々に理解していただいたり、木曽郡内をはじめ県内外に木曽馬の存在と活用についての情報が伝わり、木曽馬を飼育する施設が増える基盤作りになったりするのではないかと考えている。

（「木曽馬の里・乗馬センター」中川 剛）

2．実施に関わる経済的な根拠

平成11年度から13年度まで、本校が独立行政法人国立特殊教育総合研究所の研究協力校であり、「木曽馬の里」が研究協力機関であったため、「木曽馬の里」で行う学習については全て料金全額免除にしていただいた。

今後については不確定の状態であるが、本校の取り組みが木曽馬の保存と活用に貢献できるような方向を検討していく必要があるのではないかと思われる。